終焉の軌跡　―ラスト・トレイル―

木塚伍巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終焉の軌跡　―ラスト・トレイル―

【Ｎコード】

Ｎ３７９８Ｔ

【作者名】

木塚伍巳

【あらすじ】

ＶＲＭＭＯＲＰＧ（トウイニカ）の管理会社にてアルバイトをしている「菅原肇」。仕事終わりにゲームをプレイしていた肇は偶然にもクイーンと呼ばれる少女と出会う。肇は少女とゲーム攻略に乗り出すのだが・・・・・。

リアルとゲームを行き来する冒険系サイエンスファンタジー。

01　ログイン

『トゥイニカ』、ＥＣＤという機器を使ってまるでリアルと同じように触り、聞き、見ることができるというＶＲＭＭＯＲＰＧ（Ｖｉｒｔｕａｌ　Ｒｅａｌｉｔｙ　Ｍａｓｓｉｖｅｌｙ　Ｍｕｌｔｉｐｌａｙｅｒ　Ｏｎｌｉｎｅ　Ｒｏｌｅ　Ｐｌａｙｉｎｇ　Ｇａｍｅ）。ＥＣＤ開発会社である『イグドラシル』が運営しているネットゲームである。

ＥＣＤとはＥｌｅｃｔｒｏｅｎｃｅｐｈａｌｏｇｒａｍ　Ｃｏｎｔａｃｔ　Ｄｅｖｉｃｅの略である。脳の電気信号をネットを介する情報帯へと変換する変換機である。ＥＣＤから発する特殊な電波により、装着者にレム睡眠を誘発し、その睡眠時の脳からの電気信号をネットで処理できる情報体へと変換する。ネットからの情報はＥＣＤを通じ、脳へと流れ込む。レム睡眠を誘発するのは、人がレム睡眠の際に夢を見やすいためである。夢を見ている時、人は覚醒時と同様な活動状態を示す脳波が検出される。そして、その活動に刺激されて反射運動がみられる場合がある。この反射運動には、寝ている状態で手足を動かす、声を発する（つまりは寝言）などある。この際、発せられる電気信号が覚醒時に比べ、変換がしやすいことがわかり、睡眠状態を作り出すオプションがつけられたのだ。この技術はヴァーチャルリアリティ技術の最先端たる技術として世界に発表され様々な反響を呼んでいる。ゲームや医療、果ては軍事に至るまで様々な製品への応用が期待され、実践された。

トゥイニカはその中の一つであり、初のＥＣＤを使用したゲーム

であり、ＥＣＤを開発した会社の製作したゲームとして世界の注目の的となった。

発売されてから5年がたつがゲーム登録者は増加する一方である。トゥイニカは最初こそ、物珍しさから登録するものが多かったが、ゲームとしても秀逸であったからだ。現在ではＥＣＤを使用したゲームも何本もでているが、トゥイニカまでの人気はない。トゥイニカは現在では世界中でゲーム登録者が１００万人以上にもなっているという。

菅原肇（すがわらはじめ）はそのゲームの管理会社『ＲＥＡＬ』のアルバイトとして働いていた。管理会社と言ってもゲーム運営を行っているイグドラシルから委託されている下請けの会社だ。

と最近まで思っていたのだが、どうやらＲＥＡＬはイグドラシルとは独立した会社らしい。なぜ独立した会社が下請けのような仕事をしているのか、イグドラシルはどうしてこの会社に管理を任したのか、考えれば考えれるほど謎は深まるばかりである。

社員構成は社長に正社員が２５人、アルバイトが肇を含めて3人とそこそこな大きさの会社だ。それにも関わらず、なぜこのような会社が管理を任されているのか、甚だ疑問ではある。以前、社長にそれとなく聞いてみたが、全くそれらしい回答はもらえなかった。

仕事の内容だが、ＲＥＡＬの管理方法は他の会社とは一風変わっ

ており、社員が直接ゲームをプレイし、管理を行う。これはＲＥＡＬの『プレイヤーと分け隔てなく接する』という会社理念に基づくもので、イグドラシルや他の管理会社は直接プレイヤーとして参加することはなく、ましてやゲーム内より直接管理を行うところはほとんどない。

そのような理由のために、ＲＥＡＬには小さいながらも部署が２箇所ある。ゲーム内で直接管理を行う執行部と事務的な仕事に重点をおいた業務部だ。執行部は２０人が配属さえており、ゲーム内の監視、違反者の摘発、管理国の運営を主な仕事としている。業務部では５人が配属されておりトゥイニカの登録申請やＢＡＮなどの手配などを主な仕事としている。アルバイト員の仕事は業務部での仕事の補佐である。

そんなわけで今日もアルバイト３人は学校が終わってから会社に出勤し、仕事をこなすのだ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「眠い・・・・・・」

肇は会社の自分の机の前で書類と格闘していた。違法行為をした者のアカウントの停止手続きやら、新しいアカウント申請の書類である。本日の仕事は正社員のみなさんの職務怠慢によりアルバイトにまわされ、現在に至る。

業務部のオフィスにはアルバイトの3人のみが残り、静かなものである。各々の机には書類が山積みにされ、確認するスペースが少しあるくらいだ。そして、現在の時刻はすでに深夜3時。眠くなるのも当然ではある。

「今日はこれくらいにしない？」

肇は自分の隣の机に座る2人の男女に話しかけた。

「だよなあ、なんでこんな時間まで仕事しなくちゃいけないんだか・・・・。俺達アルバイトだぜ？これって残業扱いにしてくれんのかなあ？」

肇の左隣に気だるそうに書類を見つめながら座っていた中村陽一（なかむらよういち）は肇と同じく帰ることに賛成のようだ。

陽一は肇とは小学校からの腐れ縁である。現在通っている大学も

同じところに通っている。これが女の子だったらきっと運命を感じるかもしれないが、陽一は男である。中学、高校と同じとこに通ったという経歴をもつことを考えると、腐れ縁以上のなにものでもないだろう。何はともあれ、肇にとって1番の親友であることは間違いない。

そんな陽一だが肇の意見に賛成はしたが、きっと仕事自体する気は皆無だろう。

「これ終わらせてから帰れって先輩に言われたでしょ・・・・・・・・。二人とも・・・・・もう少し真面目にやってよ・・・・・・。そんなんだから帰れるものも帰れなくなったんじゃない・・・・・。」

陽一の隣に座る女の子、橋本結衣(はしもとゆい)が小さいがはっきりした声で言った。

結衣とは高校からの付き合いである。教室で陽介とトゥイニカの話をしていた時に混じってきたのが結衣である。当時通っていた高校ではＥＣＤを使って遊んでいる学生が少なかったために、トゥイニカという共通のゲームをしていたことから仲良くなった。現在は一流大学（女子大）に通っているが、肇と陽介との縁は続いており、同じアルバイトをすることとなった。実はこのアルバイトの紹介は結衣がしたものである。

そんな結衣は普段、とても優しく可憐な女の子なのだが、怒ると相当怖い。その結衣がどうやら軽くお怒りのようだ。

「心外だなあ。ハジメは別として俺はちゃんとやってるぞ。」

「嘘つけ！さっきから自分の書類を俺の書類の上に置いてるだろ！」

陽一の書類は結衣と同量しか残っていないのに対し、ハジメはその倍の量があった。これは陽一が自分の書類を移しかえているとしか考えられない。陽一の仕事のペースなんてものが結衣と同等なはずがない。むしろ先程、現場を目撃した。

「俺の分はとっくに終わってもいいはずなんだよ！なのになくなるどころか増えていくってどういうことだよ！」

「きっと終わりにしたのは夢の中の話だったんだよ。ハジメ、寝ちゃだめだろ。」

「ああもう！いい加減にしてよ！」

バンという音とともに結衣が突然立ち上がった。思いもよらぬ大声と行動に二人は虚をつかれたように硬直し、顔を見合わせた。

「いつも温厚な結衣さんがそうおっしゃっているんだ。ちゃんと仕事をやろうじゃないか陽一君。」

「そうだね、頑張ろう肇君。」

と引きつった笑顔を浮かべながら声を掛け合うと二人は黙々と書類へと向かい始めた。その姿を確認すると、結衣もまた書類へと再び向かい合い、ため息をつきながらも仕事に専念するのだった。

それから数時間・・・・・

「終わった～」

陽一は心のそこから疲れた声をあげ、イスの背もたれへとよりかかった。肇も結衣も疲れきっていた。それもそのはず、もうすぐ日が昇る時間帯である。だがまだ寝るわけにはいかない。この確認した書類を正社員に確認してもらわなければならない。―（メモなどを残していけば良かったのだが、3人にそこまで考える力は残ってなかった。）

「コーヒー入れてくるけど飲むよね？」

結衣が席をたった。二人は「飲む。」とだけいい、それを聞くと結衣は給湯室へと入っていった。残された二人はコーヒーがくるのを脱力した状態で待つこととなった。だが何もしていないとだんだんと眠気が襲ってくる。肇はふと思ったことを陽一に聞いてみた。

「なあ陽一。」

「ん？なんだ？」

「今日って何曜日？」

「日にちもかわったし・・・・というかもう朝だけど。というわけで土曜日。」

「どういうわけで土曜日になったかわかりづらい説明の仕方だな・・・・。そもそも昨日が何曜日だかも俺は知らなかったわけだし、その言い方だと伝わらないんじゃないか・・・・。」

「知ってるという前提で話したまでだ。」

陽介は得意げに言ってみせるが、何に対して得意げになっているのか肇は理解に苦しむとともに友人のこれからに少々不安を覚えた。

「まあ土曜日ってことがわかったからには仮眠というなのトゥイニカでもプレイするか。執行部の人は常駐で夜も5人はいるし、ＥＣＤ貸してもらおうぜ。どうせ執行部の皆様方、今日は出勤遅いだろうし。」

土曜日の業務部の出勤時刻は１０時。現在は5時。普段は8時なのだがそれでも今からでは結構な時間がある。

「いい考えだな肇！それに今日は例の大会の予選があるだろう！受付しにいこうぜ！ってことで俺がちょっくらＥＣＤ借りれるように言いにいってくるぜ！」

陽介は先程の疲れが嘘のように立ち上がる。危うく終わったばかりの書類の山を崩しそうにもなったが、駆け足で業務部から出て行こうとする。しかし、それは丁度帰ってきた結衣によって遮られた。

「あなたが行くとややこしくなるから私が行くわ。コーヒー持ってきたから、ハイ、これもって。」

そういって結衣は陽介にコーヒーの入ったカップを3つ渡した。

「いや、結衣も疲れているだろ。俺が行くから2人は待っててていいよ。」

肇も立ち上がり、執行部に向かおうとする。

「疲れてるのは肇もでしょ？だったら陽介を除いて誰が行っても変わらないでしょ。だから私が行くわ。」

「いや、仕事的には結衣が一番やってたわけだし、やっぱり俺が行くよ。」

「あのさ、なんで2人して俺を抜いて話し合ってるの？最初に俺が行くって言ったじゃん。てか結衣にいたっては俺が行くこと完全否定だよね？何？俺、嫌われてるの？俺いじけちゃうぜ？」

いじけるついでに書類の山を崩してしまった陽介のせいで書類を集め、コーヒーを飲んでから結局3人で行くこととなった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

ＲＥＡＬは２階建てのビルである。１階に業務部があり、２階に執行部がある。

業務部にはオフィスと来客用の客室、会議室がある。執行部にはデスクワークがほとんどないために、かなり狭いオフィスとＥＣＤカプセル型の配置された部屋のみが存在する。

ＥＣＤには頭部装着型、カプセル型の２種類がある。頭部装着型は簡易装置で、ヘッドホンタイプが主流となっており、他にヘルメットタイプも存在するが、見た目、形態性から現在ではヘッドホンタイプが主流となった。カプセル型は簡易型である頭部装着型よりも脳波を情報体へと変換する効率がに上昇する。このことからゲーム内では処理速度に大きくは無いが違いがでる。プレイヤーによってはこの違いが戦闘において大きな違いを生むとしてカプセル型を愛用するものも多い。しかし、カプセル型は高額であり、場所をとるため、個人所有をするものは少ない。大抵のカプセル型使用者は公共用として解放しているイグドラシルの施設に設置されているものを使用している。

執行部には執行部正社員数と同数の２０台が設置されている。実際、２０台全てが稼動することは稀で、普段は５台稼動していればいいほうである。

「今日の担当責任者って誰か知ってるか？」

「いいや、知らない。」

「たぶん、この時間帯じゃオフィスにはいないと思うし、メモ書きでもして勝手に使わせてもらいましょ。」

「いいのかよ、それで・・・・・。」

陽介の不安のこもった独り言は階段の闇の中に静かに消えていった。

３人が２階に上がり、オフィスに入ると予想通り、そこには誰もいなかった。
業務部に比べ、狭いオフィスの執行部だが、随分と整理されているようで書類まみれの業務部よりも綺麗にみえた。３人はさっさとすることをしてしまおうと部屋には結衣のみが入り、机にメモ書きを残し、オフィスを後にする。

ＥＣＤ設置部屋はオフィスのすぐ隣にある。部屋に入ると５台ずつ４列に並んだＥＣＤが確認できた。その最前列の５台と２列目も５台、計１０台のＥＣＤあ作動中を示すランプが点灯していた。

「おいおい、予想より倍の数がいるんだが・・・・。」

「まあ予想通りね。」

「「予想通りかよ！」」

肇と陽介のつっこみを華麗にスルーし、結衣が状況を簡単に２人に説明する。

「今日はレオン闘技大会の予選でしょ？だから夜も監視の目を増やしてるんでしょ。お祭り騒ぎする連中は毎年でるしね。」

「ってことは本選の明日はもしかして全員集合ですか？」

「かもしれないわね。」

「うえー」

陽介が本気で嫌そうな声をあげた。肇も苦虫をつぶしたような顔をしている。執行部の中に、２人の天敵がいるのだ。出来ればその人とはゲーム内では会いたくない。いろいろうるさいから・・・・・。

「それじゃあログイン後はいつもの酒場でね。」

「「了解。」」

「んじゃ俺ここー。」

「いや別にどこでもいいと思うんだが・・・・。」

「馬鹿やろー。気に入ったところで寝たほうが気持ちいいに決まってるだろう！」

「たぶん内装はどれも変わらないと思うんだけど・・・・。」

肇と結衣はルンルン気分で「お前はこれから俺の特等席だよー。」とか言ってＥＣＤを見ている陽介を見て、ドッと疲れがたまった気がした。

それから3人はある程度打ち合わせをして、各々カプセルの中に入った（カプセル型はカプセルの中に入り、扉を閉めてから横になり、手元にあるスイッチを押すだけというお手軽設計になっている。ヘッドホン型も同様で頭に装着して電源を入れるだけのお手軽設計だ）。

肇はカプセルを閉めると一呼吸おいてスイッチを押した。

まず肇の体に起こったのは急激な眠気だ。この眠気は先程までとは比べようも無いくらい強いものである。肇は抗うことも出来ずにすぐに瞼を閉じてしまった。そして、バチッという感覚とともに気づけば肇はトゥイニカの世界にログインを果たしていた。

01　ログイン（後書き）

とりあえず「終焉の軌跡」開幕！

物語が全く展開されていませんが

2話から話が進み始めるのでよろしくお願いします！

02　酒場《ショルト》

ログインした3人は現在、トゥイニカにある13カ国の1カ国、『レオン』の首都、『レグルス』にいた。

トゥイニカは4大陸13カ国からなっている。ローラシア大陸・アークティカ大陸・アヴァロニア大陸・バルティカ大陸の4大陸とクリオス・タウロス・ディデュモイ・カルキノス・レオン・パルテノス・ジュゴス・スコルピオス・トクソテス・アイゴケロス・ヒュドロコオス・イクテュエス・オピウコスの13カ国である。

4カ国が管理会社によって運営されており、残り8カ国がプレイヤーによって運営されている。管理会社に運営される国を『トージフト』という。そしてプレイヤーによって管理されている国を『クラティス』という。トージフトは1大陸に1カ国存在しクラティスは1大陸を除く各大陸に3カ国ずつ存在した。

その中でレオンはアークティカル大陸にあるクラティスの一つだ。その首都、レグルスにいるのは半年に1度、行われる闘技大会に参加するためである。1週間前から各々レグルス近郊を徘徊していたのだが、大会に参加届けを出すために受付所の1つがあるレグルスの酒場、『ショルト』に集まったのである。

「さて、どうしたものか・・・・・。」

金髪、碧眼の男が呟くように声を漏らしらた。冒険者然としながらも、どこか頼りなさそうなオーラをだしている。プレイヤーでは一般的な『冒険者の服』を着ているのだが、その着方がだらしないのもそれを助長している。

彼の名はトレイル。肇の使用するキャラクターで、人間族、職業は料理人（コック）である。

トゥイニカでは人間・エルフ・ドワーフ・獣人・竜人・精霊族・魔族の7種族が存在する（獣人、精霊族、魔族にはさらに細かい種族が存在するがここでは省略する）。プレイヤーはこの中から自分の作りたいキャラクターの種族を決め、キャラクターを生成する。この際、注意が必要なことが2点。まず、1度作ったキャラクターは種族の変更などは出来ないということだ。髪型や体型はある程度までは変更することが出来るが、基本キャラクターの変更は出来ない。2つ目に、プレイヤーはキャラクターを2人以上作ることは出来ない。このことを踏まえ、プレイヤーはキャラクターを作るのである。

トレイルの属する人間族はトゥイニカにおける最も個体数の多い種族である。武器の扱い、魔法両方に優れており、現実の世界と似通った姿からプレイヤーの人気ＮＯ．１種族でもある。平均的な成長をする。

このゲームの職業だが全てあわせて１００種類を超えるという噂

である。これは他のゲームではサブ職業などどよばれそうなものまでメインとして登録できてしまうが故の数である。職業は技術《スキル》の取得数や熟練度などにより転職できる職が増えていく。ある職業でなければ手に入らないスキルもあるために転職できる職業が多いプレイヤーはそれだけ多くの技術を持っていることになる。トレイルはここ2年ほど生産技術《プロダクションスキル》の習得に精を出していたので現在も生産職業の料理人なのだ。

「まさか今回の闘技大会がＰＴ《パーティ》制だったなんてな。しかも5名～最大人数の8名だとは・・・・。」

トレイルの呟きに同調したのは同じテーブルに座るツンツン頭にゴーグルの男である。腰には2丁拳銃をつるしたガンマンスタイル。彼はブライ、陽介の使用キャラクターである。種族はトレイルと同様の人間であり、職業は銃士（ガンマン）である。

「私たちソロプレイヤーには5名も揃えるのは至難よねえ。大体の人はギルドに入るかしちゃてるし、受付が今日の１０時までだからソロで残ってる人なんていないんじゃないかなあ・・・・。そもそも、大会前日２０時から受付開始で大会開始2時間前に受付終了なんて実行委員会は何を考えているのかしら。」

ショートカットに髪を切り揃えたヒーラードレスに身を包んだ女性が声を荒げながら言った。彼女は結衣の使用キャラクター、ユイリ、種族はエルフ、職業は治癒術士である。

エルフ族はトゥイニカにおいて最も個体数の少ない種族である。普段は自然と一体となって生活をしている。そのためかほかの種族に比べ魔力が高く、魔法に秀でている。　長名種なため非常に知識に富んでおり、様々な知恵をもつ。とても目がよく、射撃の名手をよく輩出する。

３人はログイン後、すぐにショルトにきたわけではなく、先に闘技大会の受付所へと足を伸ばした。朝だというのに受付所は人であふれかえり、受付を済ました物同士で情報交換や物品の交換・売買が行われていた。受付前で合流した３人はそれぞれが武芸大会に登録をする予定だったのだが、受付嬢に思いもよらぬことを言われたのだ。

「今回のレオン闘技大会はＰＴ制のフラグマッチです。」

フラグマッチとは自動選択されたフィールドで旗をとりあうのが目的とされる試合である。旗をとる方法は手でつかんでもいいし、それ以外でもつかんでよく、破壊を行っても勝利となる。とにかに早くフラグを奪取又は破壊することが勝利の条件なのだ。

ＰＴとは複数のプレイヤーの集まりである。最大人数を８人とし、共闘や生産に使う材料の確保などを目的として組まれる。ギルドの１歩手前といったところである。

そのフラグマッチをＰＴ制で行うとすると攻撃と防御の割合をよ

く考えなければいけないだろう。現段階では考える以前に参加できないが・・・・。

「なぜ誰も公式ＨＰで発表されてた情報を知らなかったのか・・・・・・。」

「公式なんて普段見ないよ。見るならｗｉｋｉだし・・・・。」

「まあ何を言っても始まらないよ。ブライとユイリはフレンドで誰か一緒に参加してくれそうな奴いるか？ちなみに俺はいない。」

βテストから5年間、ギルドにも入らずソロプレイをしてきたつけである。ブライと二人でつるんでどこへでも行っていたので、交友関係は誰よりも少ない自信がある（そんなことに自身をもってもしょうがないのだが・・・・）。人数が必要なときはノラＰＴを募集して乗り切ってきたので、あまり深く交流したプレイヤーは少ないのではないだろうか。

ギルドとは志を同じくする者で結成するコミュニティである。ギルドメンバー通しで専用のチャットやメール、掲示板などが利用できるほか、今回のようなＰＴ制のイベントや人数を必要とされる時、重宝する。何より、友好の輪を広げるのならばギルドに入ることが望ましい。ギルド作成には5人以上のメンバーが必要である。

「いたらこんなとこにいないで受付でよんでるっての！」

「ユイリは？」

「とりあえずランクの高い人に声かけてみた。トレイルとブライも試しに連絡くらいしてみようって人くらいいるでしょ？とりあえずそういう人に声だけでもかけてみるしかないしょ。」

「「全くそういう人はおりません。」」

トレイルとブライが声を揃えて断言する。結衣のため息が聞こえてきたのはいうまでもない。

「なんで2人ともソロプレイばっかりなのかなあ。みんなで遊んだほうが楽しいでしょ。」

「どっちかというと2人プレイ？」

陽介のボケは見事にスルーし話を続ける。

「まあランクの高い知り合いなんて私も1人くらいしかいないんだけどね。ところで2人はランクいくつになった？」

トゥイニカにはレベルが存在しない。そのため技術の補正値がステータスに反映され、強さとして現れる。基本ステータスはＨＰ・ＭＰ・ＳＰ・ＳＴＲ・ＤＥＦ・ＩＮＴ・ＡＧＩ・ＤＥＸ・ＬＵＣＫ・ＣＲＩの１０個。職業によるステータス補正もあるが、技術は熟練度があがる度にステータスに補正がつく。つまり強くなるためには技術の熟練度をあげなければならない。技術には大きくわけて生産技術《プロダクションスキル》・戦闘技術《コンバットスキル》・魔法技術《マジックスキル》の３つが存在する。これら３つの技術を習熟させることでプレイヤーは強さを手に入れることが出来る。

しかし、レベルがないことはプレイヤー同士における強さの確認ができないことが問題となった。そこで考えられたのがステータスと技術総数を基準とするランク付けである。かなり細かく設定されたランクは全部で１４個。Ｅ、Ｅ＋、Ｄ、Ｄ＋、Ｃ、Ｃ＋、Ｂ、Ｂ＋、Ａ、ＡＡ、ＡＡＡ、Ｓ、ＳＳ、ＳＳＳである。最も低いランクはＥ。そして最も高いランクでＳＳＳ。ここまで細かくする必要があったかといえばたぶん無かったのだろうが、強さの基準としてははっきりとわかるために重宝した。

「俺のランクはＡＡ。トレイルのランクはＡＡＡだな。」

「ＡＡＡ！？ソロプレイヤーとしては最高ランクじゃない！どうやってそこまであげたの？」

「それはあれだ。ひたすら生産技術とか増やしてたらね・・・・・。

」

「簡単に言うけどね。ＡＡＡのプレイヤーなんてそうそういるもんじゃないんだからね。トゥイニカが始まって以来、未だＳの領域に手が届いたのは２０名程度。しかもそのプレイヤーのすべてがクラティス関係者。つまりはギルドに属した人たちってこと。その直前までソロできちゃったなんて聞いたら普通に驚くでしょ。」

「まあ長くやってりゃ自然に技術数もたまるわな。それにほら、ほかのＡＡＡプレイヤーに比べりゃ生産技術ばっかりで戦闘技術なんてそれほどでもないと思うぜ？」

「よくもまあそんなことがいえるわね。２年前のこの大会の準優勝者は誰かしら？」

トレイルは苦笑い。

「まあそれでもトレイルはなんとなく納得できるけどブライが私よりランクが高いことが許せない。極刑に処すべきよ。」

ニヤニヤとトレイルのことをみていたブライだったがそれを聞いてソワソワし始める。トレイルはそれをみて再び苦笑い。

「それで話し戻すけど、ユイリが呼んだのは、さっき言ってた高ランクプレイヤー1人だけ？」

「そうね。うちのギルマスなの。トレイルもブライもよく知ってる人だと思うよ。」

「そういやお前、ギルド入ったんだな。『ＣＯＮＴＲＡＩＬ』？聞いたことないとこだが新規ギルド？」

「一昨日作ったばかりの出来立てギルド。」

「マジかよ。そんなとこに知ってるやつがいるとは思えねーけどなあ。でも5人なら初期メンバーだけで足りんじゃねーの？なのにどうしてお前はここに残っていやがるんでしょうか？」

「ブライ、優しい私はあなたたち2人に大会に参加する機会を与えるためにここにいるのよ。」

「どういうことだ？」

「簡単に言えばうちのメンバーとあなたたち2人でＰＴを組むのよ。」

「まあそんなことだろうとは思ってたけど。機会を与えるってことは参加には何か条件があるんだろう？旨い話には必ず裏があるものだ。」

「さすがトレイル。わかってるわね。ここに呼んだのはうちのギルマス。つまりはあなたたちと組むであろうメンバーで最も権威のある存在よ。その彼女がここですることといえばなんだかわかるわよね？」

トレイルが答えを言おうとすると、ブライが手を上げて発言許可を求めた。ユイリはとりあえず発言を許可する。

「わかりません。」

ユイリは許可したことが失敗だったのだと言わんばかりに頭をかかえた。そしてそのままトレイルの発言を促す。

「要は俺とブライを見定めにくるんだろ？これから一緒に戦う可能性のあるプレイヤーだものな。即席ＰＴじゃどうしても組織的な連携は難しいし、実力があるやつのほうがＰＴに組み込みやすいってこと・・・・だと思う。」

「うん、まあ正解。たぶんそろそろ他のメンバーと一緒に来ると思うんだけど・・・・。」

「それよりさ、何か外でやってないか？」

ブライが指摘したとおり、外からは激しい怒声とざわめき声が聞こえる。

「馬鹿が暴れまわってるんだろ。まあこの時期にはよくある光景の１つだな。」

酒場から野次馬しようと他のプレイヤーが外に出て行く中、狼の顔をしたプレイヤーが中に駆け込んできた。名前はロウガイ。どうやら獣人族の１つ、人狼族のプレイヤーのようだ。ロウガイは誰かを探すかのように必死に酒場中を見渡している。

「あ！」

ユイリが声をあげ、ロウガイに近寄っていく。それにならいトレイルとブライも後を追う。

「ロウ君、慌ててどうかしたの？それに他の人は？」

「ユイリさん！」

ロウガイは泣きつくようにユイリにすがり、何か伝えようとしているのだが、慌てすぎてうまく口がまわらないようだ。

「落ち着いて、深呼吸、深呼吸。」

ロウガイに深呼吸を2、3回させると少しは落ち着いたようだ。しかし、慌てている様子はなくならなかった。どうやら急な用件なのは間違いないらしい。

「そ、外に姉さんが・・・・・。マスターは他によるとこがあるって僕と姉さんだけで先にここ目指してたんですけど、この酒場の前で何かあったらしくって・・・・。猫人族の女性プレイヤーが魔人族のプレイヤーに脅されてて・・・・・。姉さんが止めにはいっちゃって・・・・・。そしたら魔人族がきれだして・・・・・。もう外は一触即発な状態で・・・・。」

「大体わかったわ。とにかく落ち着いて。まずは鈴ちゃんを助けにいかなきゃ行けないわね。トレイル、ブライ！ってあれ？」

ユイリが後ろを振り向くと2人はすでにいなかった。

「後ろにいらっしゃった人達なら僕が話し始めてすぐに酒場から出

て行きました・・・。」

ユイリはため息をつきながら、酒場の外にでた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

どうしてこんなことをしちゃったんだろう・・・。

いつもなら見てみぬ振りだったろうに・・・。

弟が近くにいたからいいとこでも見せてやろうって思ったから？

違う。

きっとあの人のせいだ。

あの人のいつも正義感いっぱいの行動をみてたから影響されちゃったんだろうなあ。

これからどうしよう・・・・。

鈴美はショルト前の騒動の中心にいた。鈴美の後ろには人間の女性プレイヤー、彩がいる。前には魔人族1人と人間族2人、ドワーフ2人の計5人ものプレイヤーがいた。どうしてか騒動を止めようなんて考えてしまって中に割り込んだら、逆に魔人族のプレイヤーが怒ってしまい、まさに戦闘でもしようかという状態である。

そもそもの騒動の始まりは彩が魔人族のプレイヤーにぶつかってしまったことが原因だったらしい。彩は別段、何かしていたというわけでなく普通に歩いていたそうだ。すると前から歩いてきた魔人族のプレイヤーが突然ぶつかってきた。しかし、彩はその時、自分の不注意でぶつかったと思い、すぐに謝ったらしい。しかし、魔人族は許してはくれなかった。さらには魔人族のプレイヤーが装備していたものに傷がついたから修理費を出せと言ってきたらしい。その修理費は莫大な額で彩には簡単に払うことは出来そうもなかった。彩は何度も謝罪したが、魔人族のプレイヤーは決してゆずらなかったのだという。そこに私が来たわけだ。仲裁に入るつもりがいつのまにか彩側に立ってしまっていたのがまずかった。魔人族のプレイヤーはそれゆえ、怒気の色を濃くしてしまった。

話を聞いた限り、彩が悪いと思えるところはない。むしろ魔人族のプレイヤーの前方不注意が原因なのではないだろうか。怒り方さえ以上である。このプレイヤー現実でいう当たり屋なのではないだろうかとさえ思えてしまう。

「本人もこれだけ謝っているんだし、許してあげるということではだめなんですか？」

「この装備はな、すげー高価なんだよ！レア物だぞレア物！やっと手に入れた物なんだ！それを傷物にされたんだから謝罪だけじゃ足りねえんだよ、この馬鹿が！修理費払わねーんだったらぶっ殺すぞ！」

そういうと大斧を装備し、「いつでもやれるんだぞ？」と言わんばかりに攻撃体勢をとった。お怒りを静めるどころか増長させてしまっている気がする。彩はさっきから黙ってしまっているし、もうダメかもしれない。とか思いつつもちょっと馬鹿呼ばわりにはプチッと来たよお姉さん。

「どうせ戦闘すればどんな防具でも傷くらいつくでしょ！あんたこそ馬鹿なんじゃないの？ちょっとぶつかったくらいで怒るなんて器が小さいのよ！そもそも話を聞いた限りじゃあなたの不注意が原因でしょ！どうせその後ろの人達に装備自慢でもしてたんでしょ！」

「何だとおおおおお！」

完全に火に油である。（やってしまった。）と思いながら鈴美は目を閉じて、攻撃されるのを待った。たぶん抗ってもすぐにやられる。それだけはわかったから。リスポーンってここからどれくらいあったっけなあ・・・・。

だが、攻撃はいつまでたってもやってこない。恐る恐る目を開けてみると、そこにはお玉で大斧を受けとけている金髪男がいた。

（ユイリさんじゃない？）

「君達怪我はない？まさか挑発するとは思わなかったよ。自分より強い相手だと思ったときは今度から何を言われてもなだめた方がいいよ。俺がいつでも受け止めてあげられるわけじゃないしね。でもまあ悪いのはコイツみたいだし、よくやったって一応言っておこう。」

金髪男が私に話しかけてくる。私はそんなことよりもお玉で大斧を受け止めていることのほうが驚きで、目が釘付けになってしまっている。周りの人達もきっとそうだろう。唖然としている。

「な、なんだお前は！」

何より一番驚いていたのは大斧を受け止められていた魔人族のプレイヤー。顔が引きつっている。

「通りすがりの野次馬1号だよ。まあここに着ちゃったからもう当事者だろうけど。あんたさ弱い物いじめなんてみっともないぜ？そんな装備しててもあんたがそれじゃ、装備がかわいそうだ。」

この言葉を聞くと魔人族のプレイヤーの怒りは頂点にたっしたようだ。斧を再び振りかざし、

戦闘技術　―　地裂断撃（アースパニッシャー）

大斧が光だし光が頂点に達した瞬間、その斧を地面へと振りおろす。その衝撃はすさまじく、地面に亀裂を起こし、地割れとなって真っ直ぐ私たちに襲い掛かってくる。

戦闘技術　―　足踏（ストンプ）　―

金髪男が右足で踏み込むと、辺りが大きく揺れた。立っていることも出来ないほどだ。どうやら何か技術をつかったようだ。揺れがおさまるといつのまにか地割れが止まっていた。

「技術の相殺っていってな、同系統又は相反する系統の技術同士をぶつけると効力を消滅又は減退させることができるんだ。熟練度によっては相殺だけじゃなくて余剰ダメージを与えることも出来るんだけど、まあ俺の使った足踏は攻撃力をもたない技術だったからな。相殺だけですんだってわけ。」

地割れの消滅を淡々と説明する金髪男。足踏は確か、初級難易度の技術だったはずだ。相手の使った技術はたぶん初級ということは

無いだろう。あれだけ激怒しているのにわざわざ初級難易度の技術を出すとは思えない。これはつまり、魔人族の男よりこの金髪男のほうが強いってことなのだろうか？

魔人族の男が少したじろぐのがわかった。攻撃が届かなかったことがやはりショックだったらしい。

「に、人数でかかればこんなやつなんてことはない！お前ら袋叩きだ！」

魔人族の男が後ろの仲間に号令をかけた。しかし、返事は返ってこない。代わりに帰ってきたのはドタドタと人が倒れる音だった。

どうしたことかと後ろを振り向くとそこには2丁拳銃を構えた男が倒れた仲間4人の中心でポーズを決めていた。拳銃の先からは発砲した跡であろう白い煙が微かに上がっている。

「お、お前！いつのまに！発砲音なんて聞こえなかったのにどうやって！」

魔人族の男にもう先程までの威勢はなかった。ただただ、何がおこっているのかわからいといった感じだ。

「おい、ブライ。穏便にすませようとしてるんだからそういうことすんなよな。」

「いやーこのままだとおいしいとこ全部お前にもってかれる気がしたからさあ。つい・・・ね。あとそこの魔人族！俺は野次馬２号だ！よろしく！」

なぜか自己紹介する銃士の男。もう金髪男に名前よばれてるのに野次馬２号はないだろう・・・・。どうやら２人は仲間みたいだけど一体誰なんだろう・・・・。弟はユイリさんをよびに言って帰ってこないし・・・・。マスターも早く来ないかなあ・・・・。

そんなことを考えているうちに倒れていた４人が光となって四散して消えてしまった。どうやら死亡してから３０秒がたったらしい。誰にも蘇生魔法やアイテムを使ってもらってなかったから、たぶんこの町のリスポーンエリアに転送されたのだと思う。

「さて、１人になっちまったな。どうする？逃げるなら追わないし、通報もしないでおいてやるよ？」

ブライとよばれた銃士が魔人族の男に逃げるよう促す。たぶんこれは最終勧告だろう。逃げなければきっと魔人族の男もさっきの４人みたいになるのは間違いない。魔人族の男はそれを聞いて「お、おぼえてろよ！」と捨て台詞を吐いて野次馬を掻き分け逃げ出した。たぶん、リスポーンに行くんだろう。魔人族の男が逃げ出すと周り

から歓声があがった。5人をあっという間に引き上げさせたことによる賞賛の歓声だろう。

「さて、野次馬のみなさーん！余興は終わりですよー。通行の邪魔なのでちゃっちゃとちってくださーい。」

金髪男がそう声をあげると、ぞろぞろと人が散りはじめる。

「あ！ユイリさん！」

散っていく人の中からユイリとロウガイが走ってくるのが見えた。

「ごめんね、そこの2人が大袈裟にやったから人がすっごい集まってね、ここまでたどり着けなかった・・・・。鈴ちゃん大丈夫？怪我してない？そっちのあなたも平気？」

「大丈夫です。そこのお玉の人に助けてもらいましたから。」

「助けたのにお玉の人はひどいなあ・・・。」

苦笑しながら金髪男がまず彩に手を差し伸べる。さっきから黙ってはいたが、一部始終を彼女も一緒に見ていた。

「怪我も・・・・・なさそうだね？立てるかい？ここだとまだやっぱり人目につくからそこの酒場に入ろう。」

「・・・・・はい。」

あれ？この子なんか顔赤くない？ＥＣＤはそういうとこまで表現しちゃうんですか？へー。あ、待ってくださいよ。私には手を差し伸べてくれないんですか金髪さん！

と思っていたら銃士が目の前に傅いていた。

「お嬢さん、お手をどうぞ。」

なぜかゾワっと背筋に来た。無意識のうちにちょっと引いてしまった。その様子が相手にも伝わったらしく、かなり落ち込んでしまった。するとユイリさんが銃士の頭を1発殴って、

「ほら、馬鹿やってないでさっさと行くわよ。」

なんて言って、酒場のほうに引っ張っていってしまった。

結局、私を立ち上がらせてくれたのは弟のロウガイだった。

０２　酒場《ショルト》（後書き）

やっぱり進まなかった・・・・。

ヒロインが登場しないのにキャラがどんどん増えてきます。

03　女王《クイーン》

酒場の中に戻ると「大丈夫だったか？」とか「災難だったな。」、「最後の啖呵はカッコよかったぜ！」などと鈴美と彩が声をかけられている。

それに引き換え、トレイルとブライには「あんな奴ら倒したくらいでいい気になるんじゃねえぞ！とか「女引き連れてるからっていい気になってるんじゃねえぞ！」などと呼びかけられる。何か納得がいかない。賞賛の言葉ならまだしも、妬みや嫉妬も多いようだがなぜ叱咤されなければいけないのだ。

入り口の近くではゆっくりと話も出来そうになかったので6人は店の一番奥へと移動した。さすがに一番奥まで来るとわざわざ声をかけにくる人もいなくなり、酒場の中でも割かし静かなものである。

席に座るとすぐにブライが口を開いた。

「じゃあとりあえず自己紹介しようぜ！な！俺はブライ！人間族で銃士《ガンマン》だ。ブライって呼んでくれ！3人ともよろしくな！」

「お前なあ、ブライってそのまんまじゃねえか。それと突然すぎんだよ。こういうときはもう少しこう間を空けてからな・・・。」

「軽いジョークだって。あと気遣いとか俺、苦手なんだよ・・・。こういう時こそパーってな！どうせ自己紹介はしたほうがいいんだ

しさ！」

「お前の冗談はどれもわかりづらいんだよ。そこの３人も反応に困ってるだろ。」

ロウガイと彩と鈴美は確かに苦笑いである。

「まあ自己紹介には反対しないけどさ。俺はトレイル。種族は人間で料理人《コック》だ。本気で戦闘するときは違う職業なんだけど、普段はこの料理人なんで何か作ってほしいものがあったら言ってくれ。３人ともよろしく。」

「次は私ね。ギルドＣＯＮＴＲＡＩＬのメンバーで人間族、治癒術士《ヒーラー》のユイリです。彩ちゃんよろしくね。」

「じゃあ次は私、私！まずはお二人とも先程はありがとうございました。おかげでこうして無事におしゃべり出来ます。まあやられてもおしゃべりは出来ましたけど・・・・。鈴美です！猫人族で盗賊《シーフ》です。それで隣で俯いているのは私の弟でロウガイっていいます。人狼族で格闘家《モンク》です。ちょっと人見知りですけど、どんどん話しかけてやってくださいね！そういうわけで２人揃ってよろしくお願いします！」

「盗賊が人助けか。まるで義賊だな。そして無駄に元気だ・・・・。

」

トレイルが小さく呟いた。だが、その言葉はきっちり鈴美に聞かれてしまった。

「〔無駄に〕は余計です。あと私は1プレイヤーとして彩ちゃんを助けただけですよ。周りの目とかを気にしたわけじゃありませんから！」

「ああ、すまん。ちょっと配役が芝居じみてたからさ。それにさっきのは元気なことはいいことだって意味で言ったんだ。」

すでに鈴美の目はトレイルに対して猜疑心たっぷりだったが、トレイルは気にしないことにした。鈴美もとりあえずトレイルのことは無視して最後の一人に自己紹介を促す。

「じゃあ最後に彩ちゃんも自己紹介しよ！せっかくフレンド登録もしたんだしね！」

「いつそんなことする時間があったよ。」

トレイルが覚えている限り、そんな時間などなかったはずだ。彼女達の出会いがさっきの巻き込まれ騒動だとすると、騒動終了後は

別々に酒場に入ったし、入った後も話している様子は無かったし、座ってからもそんな雰囲気は無かった気がした。

「乙女には秘密の通信手段があるんですよーだ。」

鈴美は舌を出してトレイルに向かってべっと言った。トレイルはそれをみてこの数分だけで自分も嫌われたものだと肩をすくめる。

「じゃあ彩ちゃんどうぞ。」

鈴美がさらに促す。当の彩はトレイルと鈴美のやりとりにあたふたしながら、どうしたらいいかと考えていたところだった。

「え、えっと、わ、私は彩っていいます。人間族で召喚士《サモナー》です。助けていただいて本当にありがとうございます。何分初めて間がないものであまりああいうのにも慣れていませんで・・・・。」

「あ、初心者だったのか。でもまあそんなことは気にしなくていいぜ。ああいうのは初心者じゃなくても手を焼くから。実際、そこの鈴美は手をやいてただろ？助けてもらえるときは助けてもらう。厚意は大事にしなきゃな。」

「それにさっきのはあいつらが悪かったんだから君が気にすることは何も無いよ。」

トレイルとブライがフォローを入れる。彩はその言葉を聞いてほっとしていた。やはり彩の中では自分がいけなかったのではという罪悪感みたいなものが拭いきれずにいた。しかし、他人に彩のせいでないといってもらったおかげで罪悪感のようなものもある程度は消えた気がした。

そんな中、鈴美は他のことが気になっていた。

「どうして私が初心者じゃないってわかったんですか？」

「おい、なんでブライには敬語なんだ・・・・。」

トレイルの言葉には鈴美は耳も傾けようとはせず、ブライに答えを促した。

「そりゃまあねえ。あの時一矢報いようと財布すろうとしてただろ。ありゃ初心者にゃ出来ねえわなあ。まあ度胸があればできるかもだけど。見た雰囲気から言って始めて1年ってとこか？」

鈴美の目が大きく見開かれた。それをみて大体あっていたようだと

確信したブライ。最初のはみたことからの推察だが、最後のはほとんど勘である。なんとなく体の動かし方で見極めてみた結果が1年くらいやってんじゃね？という結果だったのである。

「お前は馬鹿なくせに変なとこで目がいいな。」

「馬鹿とは何だ。馬鹿とは。馬鹿って言ったやつが馬鹿なんだからな！」

「なるほど、その理論で言うと馬鹿といっているお前はやはり馬鹿になってしまうな。」

「何ー！」

そこで、またしてもトレイルとブライのくだらないやりとりにユイリがため息をつく。いちいちトレイルはブライに何か言わなくてもいいのにと思い、ブライもつっこみどころが間違ってると思う。ホントに2人揃うとうるさいだけだとユイリは思っていた。とりあえず、そのやりとりをやめさせるためにも新しい話題を提供する。

「それにしてもマスター遅いわねえ。ギルドメンバーの一大事だったというのに。」

「たぶん、情報屋に行ってるんだと思います。どこのＰＴが優勝候補かかなり興味をもってたみたいだったので。あそこに入るとなかなか出てきませんしね。」

ユイリの問いに先程まで黙っていたロウガイが初めて口を開いた。

「なんだ普通にしゃべれんじゃん。ちなみにマスターって誰だ？まだ俺達聞いてないんだが。」

とブライがロウガイに話かけたのだが、ロウガイは萎縮してしまっている。どうやら人見知りというのは本当らしい。ここでは鈴美とユイリ以外は身近ではない人ってことなんだろう。

「ブライさん、ごめんなさい。気を悪くしないでくださいね。」

鈴美がすぐにロウガイのフォローに入る。さすが姉だ。

「別に気にしちゃいねえけど、ロウガイさあ、それじゃこれから困るぜ？というわけで君は俺がじきじきに鍛えてあげよう。」

「いや、ブライ。何度も言うようだがお前、理由を省くのをやめろよ。相手に伝わらねえよ。とりあえず何が困るのかとどうして鍛えることになるのかを言えよ。」

「お前はいちいちめんどくせえなあ。そんなちっちゃいことどうでもいいじゃんか。」

「ねえ、話がそれるからそれはまた後にしてくれない？」

「すまん。」「ごめん。」

トレイルとブライがなんとなくユイリから怒気を感じる。現実よりも2人の五感は研ぎ澄まされているので間違えることはまずありえない。ユイリから怒気を感じる。これは間違いようのない事実のようだった。そのため。2人に残された手段は頭を下げるということだけだ。

「わかればいいのよ。それにうちのマスターが来ないとPT登録もできないしね。」

「そうだった！登録！もうすぐ9時だし受付終了まであと3時間！というか俺達は10時には1度落ちないといけないし最悪あと1時間だぞ。」

10時には1度ログアウトして書類の確認をしてもらいに行かなければならないのだ。その書類の確認ももし間違いがあれば修正し

なければいけないし、１２時までに再びログインできるとは限らない。それを考えると出来るだけ早くユイリたちのギルドマスターを見つけて大会に参加申請をしたい。

「とりあえず時間もないし、探しに行くか。名前と特徴を教えてくれ。」

トレイルが席をたった。探しに行く気満々である。

「待ってたほうがいいとおもうけど？たぶんそろそろ来るのは間違いないし。見つけやすい人では間違いないんだけど外で見つけるといろいろ大変だと思うよ？あ、ほら来た来た！エリナー！」

酒場の入り口で立っていた人影がこちらに向かって走ってくる。その姿を見たものたちからざわめき声が上がる。どうやらかなりの有名人のようだ。

「ユイリ、探しましたよ。こんな隅っこじゃ普通わかりません。」

「マスター遅いですよ！遅刻厳禁っていったじゃないですか！それにすっごい大変だったんですよ！」

「鈴ちゃんごめんなさい。ちょっと情報屋でいろいろ気になる話を

聞いたものだから・・・・・。それより大丈夫だった？そっちのあなたも平気？」

「平気です。ありがとうございます。」

「そうですね、一応そこの2人に助けてもらったから平気ですけど。」

ユイリや鈴美、彩と楽しそうに話すそこには真っ赤なローブに身を包んだ女性がいた。ローブのフードで顔は隠れていたのだが、声と体型で女性だとは判断がついた。ローブは赤を基調としているが、ところどころに白の刺繍が施されている。

そしてトレイルとブライにはこのローブ姿に見覚えがあった。公式サイトや動画サイトにあがっている動画で最近よくみた姿である。

「「真紅の女王《クリムゾンクイーン》・・・・・。」」

トレイルとブライが同時に声をあげた。初心者の彩もこの名前には聞き覚えがあったらしく驚いた顔をしている。

人間族、魔法使いエリナ。扱う魔法から真紅の女王や紅蓮の魔女という名でプレイヤーでは知られている。最近、高ランクモンスターが大量発生する大規模戦闘地域『悪魔の園《サタニックガーデン》』をたった16名でクリアした人物のうちの1人として急激に名

が知れ渡った人物である。得意魔法は２つ名からもわかるように炎系統の魔法。特に上級魔法の威力はＳランクプレイヤーといえど舌を巻かせるほどである。

「あ、例のお二人ですね。私のこと知っていて下さるなんて光栄です。まずはお礼を。うちのメンバーがお世話になりました。お二人には何かお礼がしたいのですが・・・・何がよろしいでしょうか？残念ながら私はお二人のことを知らないのでなんともいえないのですが・・・・・。」

「以外に謙虚なんだな。魔法の使い方とか行動からもっと気の強い奴だと思っていたんだがな。」

トレイルは見た感じからの率直な意見をいった。

「人を見かけだけで判断しちゃダメですよ。私はこれでも気弱なほうなんですから。」

「よく言うぜ。大規模戦闘地域を最少数ＰＴでクリアしたやつがよ。あんな広域型上級魔法を扱えるプレイヤーなんてそうそういないんだぜ？」

「あの時はＰＴがよかったんですよ。ＡＡＡ以上のプレイヤーで組まれてましたからね。それに広域型の魔法は私の十八番なんです。まあ私のことはいいですから、何かお願いとかありません？叶えられ

る範囲でなら叶えてあげますよ。」

「それじゃあ君たちのギルドが大会に参加するのなら一緒のＰＴにいれてほしいんだ。」

「わかりました。ではユイリ、受付よろしくお願いします。」

「はいはい。」

ユイリは席を立ち、受付へと向かっていった。

「これで何の気兼ねも無く一旦ログアウトできるな。」

「一旦ログアウトされる前にお二人の戦闘傾向など教えていただけますか？ＰＴ組んだからにはメンバーの能力は把握しておきたいので。」

「わかった。俺は剣を使った近距離戦を主体とした戦闘を得意としてるな。攻撃魔法はほとんど使わない。防御魔法と強化魔法ばっかりだな。ブライは銃と銃剣を使った近・中距離を主体とした戦闘を得意としてる。長距離からの狙撃も得意だけど、前に出したほうが扱いはしやすいだろうな。何せ前に出たがる性格してるからな。ちなみに俺はＡＡＡ、ブライはＡＡランクだ。」

「ふむふむ、もしかしてお二人は『お馬鹿銃士《フールガンマン》』と『戦闘料理人《コンバットコック》』ですか？」

「なんでそう思った？」

「ＡＡＡでギルド入ってないのなんて『羊雲飯店』の店主くらいですよ。その相方って言ったら、お馬鹿銃士くらいですよね。」

トレイルは目を細め一言。

「店外規則その１。」

「店外において店の話はするべからず。やっぱり店主さんですか。」

エリナは嬉しそうに両手を合わせながらニコリと笑った。

「何が『お二人のこと知らない』だよ。あったこと会るんじゃねえか・・・。」

「店主さんとはお話したことはありますけどたぶんあなたとはない

と思いますよ？」

ブライは少し考えてみた・・・・が、

「確かにないな。」

「まあ俺はあの店でのことは回数に含んでなかったからな。っていうかあの店でも話なんてした覚えないが。」

「羊雲飯店ってなんですか？」

彩がトレイルへと質問した。鈴美とロウガイも知らないようだ。

「俺が経営するレストランだな。すげー小さい店でな。客も癖のあるような高ランクプレイヤーばっかり。そもそも店自体わかりにくいような場所で隠れて営業してるから見つけられたら幸運てとこだな。あと羊雲飯店には規則がいくつかあってな。なかなか人に知られないようにしてるんだ。店ちっちゃいしな。」

「なんでエリナさんは最初気づかなかったんですか？」

これは鈴美の質問だ。

「普段、そこの店主ってコック帽を顔が隠れるほど深く被ってるの。声もこもってるし、変人だと思ってたから、こんな人が装備してるとは思ってなかったの。」

「失礼な。あのコック帽、レア物なんだぞ。顔隠せてコックだとわかりやすい。2度おいしい装備なんだ。それと店外規則はちゃんと守れよ。」

「あ、ごめんなさい。でもあれはおかしいでしょ。あの格好で戦闘に出てるの見たら吹きだしちゃうもん。まあとりあえずお二人のことはわかったのでいいとしましょう。もういつでも落ちてもいいですよ。」

「わかった。じゃあ予選までには戻るよ。彩ちゃんはこの後どうする？フレンドの人とかとどっか行きたいなら構わず言っていいんだよ？」

「このままご一緒してててもいいですか？」

彩は申し訳なさそうにいう。

「もちろん！」

エイリの明るい声に彩も自然と笑顔になる。そしてユイリも丁度帰ってくる。

「登録終わったよ。」

「よし、じゃあ一旦落ちるとしますか。」

「それじゃあまた後で。」

トレイルとブライ、ユイリは一時ログアウトするのだった。

０３　女王《クィーン》（後書き）

忙しくてなかなか書けないでいます。もしかしたら次から１週間おきに投稿するかも・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3798t/

終焉の軌跡　－ラスト・トレイル－

2011年11月16日16時50分発行